

HBS研究部だより



Vol. 18

巻頭言

目次

巻頭言	p.1
HBS研究部長 苛原 稔	
副研究部長就任挨拶	p.2
口腔科学教育部長 市川 哲雄	
薬科学教育部長 大高 章	
栄養生命科学教育部長 宮本 賢一	
保健科学教育部長 近藤 和也	
モンゴル健康科学大学との 学術交流協定更新について	
国際コーディネーター/医学部長補佐 村澤 普恵	p.4
ASEAN-徳島大学国際シンポジウム報告	
分子医化学分野 野間 隆文	p.5
徳島大学大学院HBS研究部 アドバイザー・ボード報告	
前HBS研究部長 玉置 俊晃	p.6
旬の研究紹介	p.8
創薬生命工学分野 伊藤 孝司	
大塚講堂の施設概要	p.9
医歯薬事務部総務課長 居山 勝重	
医療教育開発センターニュース	p.10
研究部ホットニュース	
AWAサポートセンター長 本仲 純子	p.11
「国際交流のタベ」を開催して	
国際コーディネーター/医学部長補佐 村澤 普恵	p.12
第9回 HBS公開シンポジウム開催報告 HBS市民公開講座開催報告	p.13
新任教授ご挨拶	p.14
退職教授一覧	p.14
学会賞等受賞者紹介	p.15
大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長表彰	p.16
学会情報	p.16
編集後記	p.16

研究部長就任のご挨拶

HBS研究部長 苛原 稔



平成25年4月から2年間の任期で、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス（HBS）研究部長を拝命しました。難題が山積している時期に重責を担うことの責任の重さを実感し、身の引き締まる思いですが、関係各位のご支援とご協力を得て、職責を全うしたいと思います。

さて、医学、歯学、薬学、栄養、保健系の3学部5教育部を統合したHBS研究部は、国立大学法人化に伴い研究大学としての位置づけを明確にした本学において中心的組織であり、全国的にも類をみない生命科学の総合研究拠点として学内外からの期待も大きいものがあります。すでに平成16年4月に開設されてから9年が経過し、その間、曾根、林、玉置の歴代の研究部長の卓越したご指導の下、多大の成果をあげ、新しい医療の創造、高度医療人の養成、そして国際的な研究成果など、存在感のある大学院研究部として順調に発展してきました。しかし一方では、少子高齢化の中で大学間競争激化、予算・教員数削減、さらに法人統合化の問題など、現状には難問が山積しているのも事実であり、将来にわたり大きな変革が求められています。

HBS研究部が国内外で高い評価を得られ続けられるためには、国際的に活躍する先進的で指導的な研究者の育成を加速し、高いモチベーションを持って先進的な研究を遂行し、より高い成果を挙げて行くことが求められていると考えます。そのために、先端的な科学研究が可能な蔵本団地の研究基盤を生かし、先進的で国際的に評価される研究が可能な環境を整備するとともに、優秀な人材を集め、競争に勝てるヘルスバイオサイエンス研究部へと発展させて行きたいと思っています。すなわち、私に課せられたテーマは人材確保と環境整備と考えています。

大学の真の意味での財産は優秀な人材の存在です。その観点から、優秀な研究者を集めるための組織や人材登用法の改革を検討していきたいと思っています。この4月から改正労働法が施行されて、その影響をどのように計るかは危急の課題ですが、それと並行して、長期的な人材育成を目指して行く必要があります。例えば、MD, PhDコースへの進学率を高めるなど、将来にわたり徳島大学で研究を行う人材育成の基盤を作って行きたいと思っています。また、学内にとどまらず、学外からの優秀な若手スタッフを積極的に登用する人事システムを待遇面、研究支援面も含めて構築したいと考えます。それにより優秀な人材を確保して研究部の活性化に役立てたいと思います。また、諸外国の研究員をより多く受け入れ、国際的に貢献する研究部にしたいと思っています。

環境面では、蔵本団地にはここ数年で優れた研究施設が完成し、先端的な研究を推進する環境が整備されます。これらの素晴らしい施設をいかに役立てるかがHBS研究部の今後の課題です。そこでまず、各分野の教員・研究者が独創的で特色ある研究を落ち着いた環境でできるように、外部資金の獲得や人材配置の在り方、事務系を含めた研究支援体制の見直しと改善に取り組みます。加えて、HBS研究部内の各分野の連携、常三島地区の研究部との異領域連携、基礎研究部門と病院を中心とした応用研究部門の橋渡し研究による連携、そして外国を含めた学外の先端的研究施設との連携など、多様な連携を円滑に推進して総合力で戦える研究支援体制を作り、従来にはない特色のある生命科学研究が行われるように、共同研究プロジェクトや公募型プロジェクトの導入、研究領域の支援強化など、ソフト面での研究体制の整備に取り組みたいと思います。

いずれにしても、これらを進めるには皆様の多大なご支援が必要です。ご協力のほど、何卒宜しくお願いします。

副研究部長就任挨拶



副研究部長 [口腔科学教育部長]

市川 哲雄

平成25年4月から前期2年に引き続きヘルスバイオサイエンス研究部副研究部長(歯学系)・口腔科学教育部長を担当させていただくこととなりました。苛原 稔新研究部長のもとHBS研究部の発展に努めていきたいと考えております。

第二期中期目標・計画期間も後半の4年目になり、大学の区別化、評価がさらに加速するものと思います。国際的通用性のある教育・研究、リージョナルセンターとしての役割、個性的で存在感のある徳島大学HBS研究部をめざし、まず各系が目標を達成しなければなりません。次に、蔵本地区の5大学院教育部、大学病院、疾患酵素・疾患プロテオゲノム両センター等が連携し、施設・情報の共有化、IPEの推進、医療系クラスターに代表されるような特色ある研究課題の設

定、融合研究を目指すことが重要になります。

口腔科学教育部は2007年の学部口腔保健学科の設置に引き続いて、2011年に口腔科学教育部に口腔保健学修士課程を設置しました。さらに、博士課程口腔保健学専攻(仮称)の設置を目指して活動を始めております。本教育部では、本学の特色と地域性を鑑み、3つの領域①予防歯学、口腔保健学を中心としてフィールド研究・活動、②高齢者を対象とした治療、医療デバイスの開発・評価、③口腔免疫学的アプローチ、再生工学を中心とした難治性口腔疾患の克服の研究を推進することになっております。

学内外の連携を図り、世界に伍する研究者、高度専門職業人の育成を目指していきたいと考えております。よろしくお願いいたします。



副研究部長 [薬科学教育部長]

大高 章

平成25年4月1日より、薬学部長、薬科学教育部長、そして苛原 稔HBS研究部長の下、ヘルスバイオサイエンス(HBS)研究部の副研究部長を務めさせていただきます。苛原研究部長の指揮下、HBS研究部の発展に尽力させていただく所存です。私は昭和59年に京都大学薬学部を卒業後、大学院、助手、助教授時代を京都大学で過ごし、平成17年4月から徳島大学でお世話になっております。まだまだ新参者かもしれませんが、新参者であるがゆえ、徳島大学の長所、短所を冷静に見つめることができるのではと思っております。

さて、昨年末、政権が自民党へ移り、何となく日本再生に向けた息吹が感じられるようになって参りました。再生の一翼として、政府が医療産業を掲げている

ことは皆様も良くご存じのことと思います。HBS研究部がある蔵本キャンパスは「医療系分野が高度に集中した環境」と宣伝文句にありますが、まさに再生への風を受け止めるのに最適な環境にあります。私は、薬学部出身者として有機化学に携わって参りました。薬の構造を見ていると「この構造があるから効くのか! 美しい構造をしているなあ」と妄想が掻き立てられます。背景の異なる多くの先生方の知恵を集積し、「日本の再生は医療から」を具現化できる体制の構築、そして、その過程において未来を創造開拓できる若者に「こころざし」を抱ける環境を提供するため、HBS研究部の副研究部長として微力ながら邁進したいと考えております。皆様のご支援、ご協力が頂けますようよろしくお願いいたします。



副研究部長〔栄養生命科学教育部長〕

宮 本 賢 一

平成25年4月よりHBS副研究部長・栄養生命科学教育部長を、再度担当させていただきます。前回担当させていただいた3年間（平成18年から平成21年3月）は、HBS研究部の発足まもない時期であり、医歯薬を融合した共通カリキュラムの開講など、次々に山積する問題点への対応等、忙しい毎日を思い出します。その後、HBS研究部は、5教育部に発展し、大きな飛躍を遂げております。この間、栄養生命科学教育部も、新しく加わった教授陣を中心に、活発な活動を継続しております。その根本には、「食律生命」の理念のもと栄養学分野の指導的な研究者および教育者を育成するために設立された、我が国で最初の栄養学大学院であるという自負に基づいています。これまで、栄養生命科学教育部では、日本中で約130校まで増えた管理栄養士養成校への教育研究者の育成を目的に、50年間、卒業生を送り出してきました。しかし、著しく進歩する医学・医療分野においては、世界に通じる臨床栄養の教育研究者の育成が急務となっています。そのため、学科創設50周年を契機に栄養学科内に臨床

系の新分野（疾患治療栄養学分野）を設立し、病院栄養部と共同で新しい教育研究プログラムを支援する体制を構築いたしました。これにより、臨床栄養学を担当する分野は、臨床栄養学分野、代謝栄養学分野と新分野の3分野体制となり、社会人大学院生の受け入れも可能になりました。さらに、基礎系分野（生体栄養学分野、分子栄養学分野、食品機能学分野など）も臨床研究・治験を積極的に行っていく体制も整いつつあります。また、大学病院、医療教育開発センターや臨床試験管理センターの支援を得て、国内随一の臨床栄養学博士養成システムの構築を目指しています。このように、栄養系では、HBS教育部の特徴を生かして、医学、歯学、薬学・栄養学・保健学の医療系の全領域を網羅する幅広い教育・研究指導が受けられる体制が整備されている点も他大学にはない特色です。著しく進歩する医学・医療を先導できる臨床栄養学の教育研究者を育成する為、HBS研究部の副研究部長として努力したいと考えておりますので、ご指導・ご助言をよろしくお願い申し上げます。



副研究部長〔保健科学教育部長〕

近 藤 和 也

今年の4月よりHBS研究部の副研究部長（保健科学教育部）に就任します近藤和也です。よろしくお願いいたします。保健科学教育部は、大学院博士前期（修士）課程が設置され6年、大学院博士後期課程が設置され4年が経過し、大きな転換点をむかえています。“知識を教える”専門学校から“知恵を創出する”大学、さらに“その知恵を使って社会に貢献する”大学・大学院の時代へ。私たち保健科学教育部がいかなる人材を輩出すべきかを考える時です。具体的には、医療の現場に役に立つ高度専門職医療人と世界的な研究成果やイノベーションを創出する研究者の育成が急務であると思います。高度専門職医療人の育成では、大学病院と密な連携をとり、シームレスな教育体制を構築

します。看護学専攻では、現在、がん専門看護師コース、助産実践コース、養護教諭専修免許コースがありますが、それを充実・発展させるとともに他の専門看護師コースの開設も努力していく予定です。放射線技術科学専攻では、医学物理士コースとともに放射線治療技師、MRI検査技師、核医学専門技師を育成する体制を構築する予定です。検査技術科学専攻では、超音波技師や胚培養士を育成していますがさらに充実・発展させていきます。研究者育成では、医学部にあるStudent Lab. システムを活用し、学部学生の早い時期からの研究参加を推進していきます。さらに、医学科、栄養学科、歯学部、薬学部、工学部などの基礎研究を行っている分野と共同研究を行い、基礎研究のできる大学院生を育成する予定です。

モンゴル健康科学大学との学術交流協定更新について

国際コーディネーター／医学部長補佐 村澤 普恵

徳島大学は、平成24年（2012年）10月5日にモンゴル健康科学大学（モンゴル・ウランバートル）（以下HSUM）との学術交流協定を更新しました。当日は、香川征徳島大学長が同大学を訪問し、HSUM創立70周年記念行事への出席に併せて、学術交流協定調印式が行われ、本学医学部および歯学部との学生交流の覚書も更新されました。調印式後には、香川学長の略歴とHSUMに対するこれまでの貢献が紹介され、HSUMから香川学長に名誉博士号が授与されました。その後、モンゴル徳島大学同窓会（MAUTA: Mongolian Association of The University of Tokushima Alumni）設立第一回総会が行われ、徳島大学口腔科学教育部修了のPurevsuren Davaadorj DDS, PhD先生が初代同窓会長に選出されました。

また同日には、HSUM創立70周年記念行事の一環として開催された国際会議で、赤池雅史医療教育開発センター長が、「Current Advances of Medical Education in The University of Tokushima」と題した講演をし、医療教育開発センターが中心となって取り組んでいる徳島大学における医療人教育について紹介しました。

夜のレセプションでは、西野瑞徳徳島大学名誉教授・HSUM徳島大学オフィス長に、モンゴル大統領からのモンゴル民主革命20周年記念メダルが授与されました。

本学とHSUMとの交流は、平成14年（2002年）の医学部の交流から始まり、その後、歯学部、薬学部の交流に発展し、平成19年（2007年）に青野敏博学長（当時）がHSUMを訪問し大学間協定締結の調印式が行われました。

HSUMは、1942年に国立大学として創設され、1961年にMongolian State Medical Institute、1991年にNational Medical University of Mongolia、2003年に現在のHealth Sciences University of Mongolia（モンゴル健康科学大学）と改名されました。創設以来、12,800余名に及ぶ医療人（医師、漢方医、歯科医師、公衆衛生管理者、薬剤師）を輩出しています。現在HSUMには、医学部、伝統医学部、歯学部、公衆衛生学部、薬学部、生命医学部、看護学部の計7学部があり、44講座、研究施設、図書館、保健管理センターなどを備えています。平成23年（2011年）9月には歯学部および歯学部附属病院の新棟が完成し、また現在は、医学部附属病院の改修・拡張工事が急ピッチで進められています。その医学部附属病院には、徳島大学から寄贈された医療機器が設置されており、患者さんの治療や医学の研究のために役立てられています。

これまでに15名の留学生が本学を修了し、母校などで活躍しています。現在25名（平成25年1月1日現在）のHSUMからの留学生が本学で学んでいます。この学術交流協定、学生交流覚書の更新により、両大学の交流の更なる発展が期待されます。



調印後、学術交流協定書を交換する
ハグスレン学長（左）と香川学長（右）



香川学長に名誉博士号の授与



国際会議で講演する
赤池医療教育開発センター長



民主革命20周年記念メダルを
授与される西野名誉教授（左）



学術交流協定締結後の記念撮影

ASEAN- 徳島大学国際シンポジウム報告

分子医化学分野 野間 隆文

徳島大学歯学部は「口腔からQOL向上を目指す連携研究（平成20年度～24年度）」と「ICTを活用した地域実践型口腔保健教育による高度専門職業人の育成（平成23年度～27年度）」の研究・教育活動の成果発表およびASEAN地域の若手研究者との学術交流を目的として、学術交流協定を結んでいるインドネシア共和国の2大学であるムハマディア大学医学部歯学科、ハントゥア大学歯学部との共催で、平成24年12月7～8日、ジャワ島ジョグジャカルタ市アンバルクモホテルにおいて、ASEAN plus and TOKUSHIMA JOINT INTERNATIONAL CONFERENCE “Strategic Achievement of Oral Sciences and Promotion of Quality of Life and Professional Education for Oral Hygienists by Using Information and Communication Technology”を開催した。

学会初日の開会の挨拶において、まず徳島大学の市川歯学部長から3大学で学会を開催する趣旨として、学術交流の実質化に寄与する意義が述べられ、続いて徳島大学ならびに徳島県の紹介がなされた（写真1）。その後、順次「生体材料と再生工学」「咀嚼と嚥下」「口腔がん・生体材料・歯科手術」「口腔環境」「口腔保健と教育」「特別講演」の各セッションが開かれ、各国からの招待演者によって研究成果の報告や講演がなされた。また「ポスターセッション」では暑いオープンスペースでの熱い質疑が繰り広げられた。学会の総登録者数は800名で、徳島大学からは総勢27名が参加した（写真2）。学会初日夕刻に開催された歓迎会ではムハマディア大学、ハントゥア大学、徳島大学の各歯学部長の挨拶を皮切りに、参加者はインドネシアの食事や文化・芸能を楽しむとともに、各国からの参加者との交流を深めた。2日目の夕食会ではポスター賞の発表があり、5名の受賞者のうち徳島大学からは、大学院生のArya Adiningrat氏と助教の後藤崇晴先生が受賞の榮譽に浴した（写真3）。なお、学会期間中、三宅歯学部教授を代表とする一行がムハマディア大学を表敬訪問し、学長や国際交流担当副学長と歓談し、今後の学術交流の発展的拡大を確認し合った（写真4）。

翌9日、一行は帰国便に搭乗するまでの時間を活用して、ガジャマダ大学に於いて開催された、徳島大学を卒業したインドネシアの人々の同窓会設立準備会に徳島大学国際センターの金教授と事務官とともに参加した。徳島大学の歯学、工学などの各大学院を卒業した多くの懐かしい卒業生の活動報告を拝聴した。その間、三宅歯学部教授らは、ガジャマダ大学歯学部を表敬訪問し、ガジャマダ大学歯学部長や3名の副学部長と挨拶をかわし、国際交流をさらに深めることができた（写真5）。

本学会の成果としては、若手研究者の優れた研究成果の報告があり、各人の地道な研究活動が窺えたことや積極的な大学院生の発表が数多くあったことなどから、徳島大学の研究力の着実な進歩が窺えた。また、若手研究者の間で国際交流の機会が持て、相互理解の実（じつ）が得られた。総括すると、次世代への期待が膨らみ、成功裏に終わったと言える。



写真1 市川歯学部長による開会の挨拶



写真2 徳島大学からの参加者



写真3 ポスター賞表彰式



写真4 ムハマディア大学学長への表敬訪問



写真5 ガジャマダ大学歯学部への表敬訪問

徳島大学大学院HBS研究部アドバイザー・ボード報告

前HBS研究部長 玉置 俊晃

平成24年9月6日に徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部にとって第2回目のアドバイザー・ボードによる外部評価委員会が、開催された。アドバイザー・ボードは、松澤佑次（財団法人住友病院院長）、杉野弘（産業技術総合研究所客員研究員）、恵比須繁之（大阪大学理事・副学長）、山口朗（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔病理学分野教授）、桐野豊（徳島文理大学学長）、山下修司（大塚製薬株式会社医薬品事業部顧問）、田中啓二（東京都医学総合研究所長）、佐々木敏（東京大学大学院医学系研究科社会予防疫学分野教授）、井上智子（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科長）の先生方であり、当日は7名の先生が出席いただいた。杉野弘先生と田中啓二先生がそれぞれの御理由にて出席いただけなかったが、書類による評価を実施していただき報告書を提出していただいた。徳島大学からは、野地澄晴研究担当理事、玉置俊晃研究部長、市川哲雄・際田弘志・多田敏子各副研究部長、武田英二副研究部長代理、赤池雅史医療教育開発センター長が出席した。HBS研究部長が、HBS研究部全体の現状と平成20年度～平成23年度の教育研究成果の報告と課題について総括的な報告をおこなった。その後、各系（医学、歯学、薬学、栄養学、保健学）と医療教育開発センターから4年間の総括と今後の展望に付いての報告があった。報告毎に、アドバイザー・ボード委員から質問を受けると共に、建設的なご批判と貴重なご意見をいただいた。また、最後に4年間のHBS研究部活動に関して総合討論を行った。

4年間のHBS研究部活動について報告内容をまとめる。4年間の論文発表数は、HBS研究部全体の論文発表数で見ると直前の4年間よりインパクトファクター5点以上の論文は、わずかであるが増加していた。外部資金の獲得もHBS研究部教員1名あたりの獲得金額でも微増であるが増えている。国立大学法人に移行して、経済的にも人材的にも厳しい中での増加でありHBS研究部構成員の努力の

賜であると思う。この4年間で最大の成果は、6つの教育研究クラスターが組織されて、HBS研究部設置の目的に沿った学部学科組織・研究分野横断的に新しい教育研究組織が構築されたことであろう。この取り組みは、文部科学省の「医療系クラスターによる組織的な大学院教育」が採択されたことで促進された。このクラスターの教育面活動では、複数教員による大学院生の指導体制や最先端研究内容をテーマとしたクラスターコアセミナーが実践された。また、若手研究者の育成面では、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラムに、心・血管クラスターから「ニュートリウムを基盤とした加齢による循環器障害研究の国際ネットワーク構築」と脳科学クラスターから「脳血管病克服のための国際共同研究ネットワークの構築」が採択される結果を出した。今後は、大学院教育改革プログラムによる予算措置が無くなった後にも、この取組をどの様に発展させていくかが大きな課題になると共にHBS研究部としての統合効果が問われる。この4年間のもう1つの成果は、平成20年4月に蔵本地区の研究支援部門を統一した「HBS総合研究支援センター」が設置されたことである。共同利用・共同研究体制の支援センターとしてのHBS総合研究支援センターには、先端医療研究部門、動物資源研究部門、バイオイメージング研究部門の3部門が整備された。特に、バイオイメージング研究部門は平成20年度補正予算でバイオイメージング関連の大型研究機器が整備されたのに伴って設置された。平成22年5月にはニコンインステックとの包括協定を結び、平成22年11月には理化学研究所と連携大学院協定が結ばれると共に、バイオイメージングの専任教員が配置され先端研究を強力に支援する最新のイメージング機器との活用体制が整った。次の4年間には、最新のバイオイメージ技術を駆使した研究成果が大いに期待される。さらに、産官学の連携を目指す知的クラスター創成事業「徳島健康・医療クラスター」（平成



22年から平成25年)では、徳島大学糖尿病臨床・研究開発センターを設置し、研究の中核をHBS研究部メンバーが担っている。このセンターは、徳島の県庁、医師会、企業はじめ市民との連携のもと、世界レベルの糖尿病研究開発臨床拠点形成を目指しており、文科省をはじめ各方面から中間評価で高い評価を得た。

一方、反省点も多い。平成15年に採択されて5年間実施した21世紀COEプログラムに「多因子疾患克服へのプロテオミクス研究拠点」と「ストレス制御をめざす栄養科学」の後継となるグローバルCOEの獲得が出来なかった。2つのプログラムが目標とした新しい研究分野の国際的研究拠点形成とその分野にふさわしい人材育成に成果を出せなかったのか?新しい研究分野の国際的研究拠点形成に成果を残すことは簡単なことではないが、HBS研究部が生命科学の分野で多様性と融合性を持つ総合大学院として設立されたことを考えると、反省と今後の対応に関する戦略を再検討する必要がある。また、大学院改革の超目玉競争の資金のグローバル大学院事業も毎年チャレンジしているが未だ成果が出ていない。

各委員から頂いた主な意見を紹介したい。松澤佑次委員は、5つの医療系領域の有機的な融合の結果、つまりHBSの組織形成によりどのような実績が得られたか、又それらの実績が各領域にどのように還元出来たかについての検証が必要であると指摘している。杉野弘委員は、HBS研究部は研究分野も多様で、かつ、大きな組織であり、円滑で効率的な運営には、役割分担を明確にした組織の管理運営体制の整備を求めた。さらに、情報の収集力の不足は深刻であり、プロジェクト立案・運営ができるコーディネーターの不在が大きな問題であることを指摘した。恵比須繁之委員は、女性教授及び准教授の比率が低いことと45歳以上の助教に占める女性比率が52.2%にも及ぶ現実を問題視した。また、「医療系クラスターによる組織的大学院教育」の取組をさらに発展させるために「博士課程教育リーディングプログラム」

の採択を目指して、徳島大学全体で戦略的に取り組む必要性を強調した。山口朗委員は、6つのクラスターによる学際的な研究成果と人材の輩出を期待し、クラスター形成前後で研究論文のqualityや海外留学生の数などの検証を求めた。桐野豊委員は、医療教育研究センターによる教育活動と先端医療研究部門、動物資源研究部門、バイオイメージング研究部門という研究支援組織の充実を高く評価していただいた。山下修司委員は、HBS研究部の研究成果を産学官連携推進部やマスコミを通じて学外へ積極的にアピールすることの重要性を指摘した。田中啓二委員は、近い将来に世界で活躍する人材なくして、大学の基盤的な発展は望めないのでは、思い切った予算措置を講じて今以上に大学院学生を積極的に海外へ送り出すプログラムを拡充・拡大する必要性に言及した。佐々木敏委員は、海外の医療系の総合大学では、多分野の医療科学の共同による臨床研究や疫学研究を活発に行い、顕著な業績を上げているが、HBS研究部ではヒト集団を扱った臨床研究や疫学研究に属する研究が相対的に少ないことを指摘した。井上智子委員は、保健学系が中心となりHBS研究部の多学問分野からの参画があるHBSクラスターの設置を提案している。

一部、かなり厳しいご意見も頂いたが、アドバイザー・ボードの委員の先生方から頂いた暖かい励ましの言葉や貴重なアドバイスは今後のHBS研究部活動に役立てていきたいと考えている。



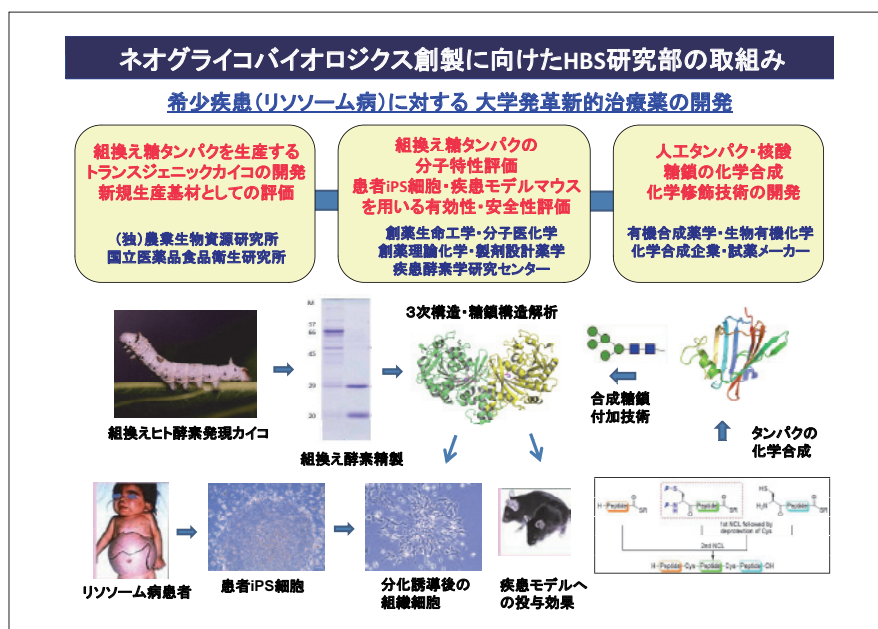
「バイオ医薬品からネオグライコバイオロジクスへの展開」

創薬生命工学分野 伊藤 孝司

バイオ医薬品は、組換えDNA技術や細胞培養などを利用して製造される医薬品である。近年、バイオ医薬品の発展は目覚ましく、2010年時点の医薬品の世界売上げランキングトップ10位以内に抗体医薬品が5品目含まれる。バイオ医薬品のほとんどがヒトタンパク医薬品であり、大腸菌、酵母、昆虫細胞、植物細胞、哺乳類細胞（CHOやHT1080）、トランスジェニック動物および植物が宿主として利用されている。特に抗体分子をはじめ動物細胞で生産され、哺乳類型糖鎖を含む組換え糖タンパク製剤（グライコバイオロジクス）がバイオ医薬品の60%以上を占めるようになっている。

最近、糖タンパクに付加される糖鎖の数や構造を人為的に改変し、天然型よりも高機能化したグライコバイオロジクスが注目されている。例えば、赤血球前駆細胞の増殖因子で腎性貧血の治療に用いられるエリスロポエチンでは、非還元末端シアル酸の数や分岐側鎖数などの糖鎖構造改変に基づき体内動態や有効性を制御でき、エポエチンアルファ、ベータ、ガンマー、ジータ、カップー等の機能改良型や後続バイオ製品（バイオシミラー）が上市されている。また抗体医薬では協和発酵-キリン（株）が、CHO細胞を用いて抗体分子の定常領域に付加されるN型糖鎖のコア構造に含まれるL-フコース残基を除去することにより、抗体依存性細胞障害（ADCC）反応を100倍以上に増大させる糖鎖改変技術（ボテリジェント技術）を開発している。また希少疾患であるリソソーム病（リソソーム酵素欠損症）の一部（現在6種の疾患）に対し、組換えヒトリソソーム酵素に付加される末端マンノース6-リン酸（M6P）残基含有糖鎖と、患者組織細胞表面に存在する特異的な糖鎖レセプター（M6プレセプター等）との結合を介した細胞内取り込みとリソソームへの輸送機構に基づく酵素補充療法（Enzyme replacement therapy, ERT）が臨床応用されている。

しかし哺乳類培養細胞株を用いる糖タンパク製剤の大量生産は困難で、高コストが問題となる。またウイルスやプリオン等の感染の危険性もある。さらに哺乳類以外の宿主を利用した安価な大量生産も望まれているが、タンパク翻訳後の糖鎖修飾は宿主の生物種により異なるため、ヒトへの投与の際に異種糖鎖抗原性の問題が生じる。このような組換えヒト糖タンパクの生産量の向上と糖鎖抗原性の克服のために、当研究室では（独）産業技術総合研究所・生物プロセス研究部門と共同し、メタノール資化酵母変異株を用い、M6P高含有のヒト型糖鎖構造をもつ組換えヒトリソソーム酵素を作製・精製した。また中枢神経障害を伴う疾患モデルマウスに対する脳内ERTを開発し、その運動機能の回復と寿命を延長させることに成功している。最近、バクテリア由来のエンド型糖転移酵素と、化学合成したN型糖鎖のオキサザリン誘導体を利用し、組換えカイコで大量発現・精製したヒトリソソーム酵素に化学合成糖鎖を人工的に付加したネオグライコ酵素を作製し、リソソーム病患者 iPS細胞から分化誘導した神経系細胞に対する有効性を検討している。さらに現在HBS研究部および外部研究機関と連携し、徳島大学発の革新的医薬品のシーズとしてのネオグライコバイオロジクスの創製に向けた取り組みを推進している（図参照）。このようにバイオ医薬品は日々進化を遂げており、大学発のシーズにも製薬企業からの期待が寄せられている。



大塚講堂の施設概要

医歯薬事務部総務課長 居山 勝重

本年4月1日（月）にリニューアルオープンする大塚講堂の玄関を入ると、正面にラウンジがあり、大塚製薬株式会社の創業者である大塚武三郎氏のレリーフや直筆の書が飾られています。

大塚講堂のメインホールである大ホールは、席数655席で、最前列には車椅子用のスペースが18席分設けられています。旧大塚講堂は、1000席でしたので席数は減りますが、ゆったり

と座っていただけるよう椅子の幅・奥行きや前後の間隔を広くするとともに、収納式のメモ台を設置し、利用しやすい快適な座席としています。また、無線LANによりインターネットが利用できる環境を整備しているほか、大ホールの模様が小ホールやホワイエ等でも見ることができるようモニターテレビやプロジェクターも設置されています。なお、大ホール内の空調設備は、前部と後部がそれぞれ同じような環境となるように配慮されています。

2階には、主として講義での利用が中心となる108人収容の小ホールが2室設けられており、間仕切りを撤去すれば、216人収容のホールとしても利用することができます。

各階の東側にあるホワイエは、全面ガラス張りの開放的なスペースとしており、教職員・学生等の共用の憩いの場として、平日の7時30分から19時までの間、開放しています。また、ホワイエには展示ボードが設置されていますので、ポスター会場としても利用することができます。

このほか、ゲストルーム、控室のほか、エレベータ、多目的トイレや車椅子用の駐車場・屋外スロープも設置されており、バリアフリーにも配慮した建物となっています。

大塚講堂を利用する際は、大塚講堂使用規則や大塚講堂使用心得を遵守していただき、多数の方にご利用していただきますようお願いいたします。大塚講堂の利用を希望する場合は、大ホールは医歯薬事務部総務課管理係（内線9003又は9119）、小ホールは学務課第一教務係（内線2130又は2131）にお申し込みください。

なお、大塚講堂のリニューアルオープンについては「医学部だより第26号」に掲載されていますので、ご参照していただきますようお願いします。



講堂外観



正面玄関ホール



大ホール



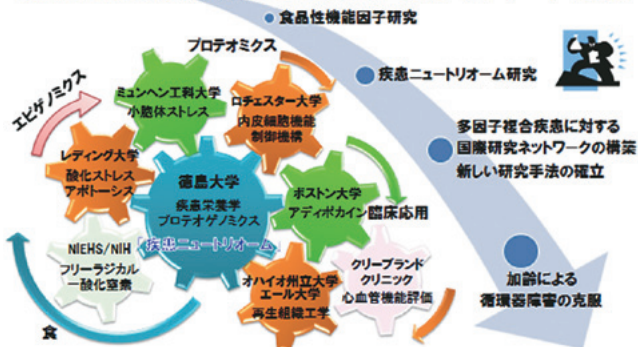
ゲストルーム

● 医療教育開発センターニュース

～取組紹介～

● 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

疾患ニュートリウムを基盤とした 加齢による循環器障害研究の国際ネットワーク構築



若手研究者7名の海外派遣を支援しています。

- 黒部裕嗣 (心臓血管外科学分野 助教) エール大学、オハイオ州立大学(米国)
- 塩田あすか (臨床栄養学分野 特任助教) ミュンヘン工科大学(ドイツ)
- 楠瀬賢也 (徳島大学病院循環器内科 助教) クリーブランドクリニック(米国)
- 堀ノ内裕也 (徳島大学病院薬剤部/医学部研究員) NIEHS/NIH(米国)
- 吉田守美子 (生体情報内科学分野 助教) ボストン大学(米国)
- 向井理恵 (食品機能学分野 助教) レディング大学(英国)
- 石澤有紀 (薬理学分野 助教) ロチェスター大学(米国)

平成24年12月12日(水)には、帰国した研究員を中心として第3回リサーチカンファレンスを開催しました。

● スキルス・ラボ改修 — 高機能シミュレータの導入 —

総合的シミュレーション教育に対応するため、第3、第4会議室をリフォームし、高度医療技術トレーニング設備の整備が行われました。この設備充実に伴い、これまでできなかった高度な医療技術のトレーニングが可能となります。

◆ バーチャルシミュレーター

- ・ 腹腔鏡下手術バーチャルシミュレータ「Lap Mentor™」
- ・ 血管インターベンションシミュレーショントレーナー「MENTICS VIST」
- ・ 心エコートレーニングシミュレーターバイメディックス「VIMEDIX™」

◆ 摘出動物臓器によるWet Laboの実現

- ・ ハーモニックスカルペルⅡ
- ・ ビジュアライザー
- ・ スカイルックスクローバースタンド
- ・ 照明灯 LFX 3-D-BKN
- ・ 動物臓器保管庫 (冷凍冷蔵庫)
- ・ 卓上超音波洗浄機
- ・ オートクレーブ

◆ 記録システム

- ・ ウェブカメラシステム

◆ TV (Web) 会議システム



術野映像双方向配信システム



遠隔地で難渋する症例にも対応でき、最新の診断・治療法を学習可能。

医学臨床A棟1階

スキルス・ラボ4			
準備室	スキルス・ラボ1A	スキルス・ラボ1B	スキルス・ラボ2
EV (12)	(2.8)	(2.8)	(5.7)
器具室	スキルス・ラボ3	演習室1 (2.0)	2 (2.7)
(2.8)	(2.8)	3 (2.7)	4 (2.7)
		5 (2.7)	6 (1.1)
		前室 (3.5)	
	第四会議室 (スキルス・ラボ6) (5.2)	第三会議室 (スキルス・ラボ5) (4.8)	医療教育開発センター事務局 (5.0)
			教員室 (2.5)

() 内は面積: m² --- 可動壁

● 第2回医療教育講演会

「病院を支える人たち、そして地域で患者さんを支える人たち」

日時: 平成24年9月10日(月) 18:00-19:00

場所: 長井記念ホール

参加人数: 225名

講師: 福島統教授(東京慈恵会医科大学教育センター長)

医療現場で実際に発生した医療事故を題材として、多職種連携の必要性とその教育についてご講演いただきました。



● 第6回チーム医療入門～蔵本地区1年生合同WS～

「チーム医療を行うために必要な能力とは？」

日時: 平成24年9月28日(金) 12:45-17:00

場所: 長井記念ホール、保健学科大講義室 他

参加人数: 413名(全1年生の92%)

医療人を目指す学生が相互理解を深め、将来ともに円滑なチーム医療を行える基盤形成を目的として、蔵本地区の1年生全員を対象として行われています。9月10日に行われた福島先生のご講演をもとに、KJ法を用いてグループワークを行いました。



● 第4回Simulation医療教育Workshop in 徳島

日時: 平成24年10月20日(土) 9:00-16:40

場所: 医学部第3、第4会議室、CSL1、2

参加人数: 23名

講師: 安井清孝先生

(福島県立医科大学災害医療総合学習センター)

シミュレーション教育の経験と実績を持つ安井先生をお招きし、4回目のシミュレーションWSを開催しました。今回は災害をテーマとしたシミュレーション教育の提案と実践、ファシリテートの方法について学びました。



● 第3回医療教育講演会「いのちの傍で — おとなとこども —」

日時: 平成24年11月14日(水) 18:00-19:30

場所: 長井記念ホール

参加人数: 223名

講師: 細谷亮太先生

(聖路加国際病院副院長)

40年来小児科医として子どもたちの治療に携わってこられ、また俳人としてもご活躍されておられる細谷先生をお招きしました。



● 第2回 How to 医療コミュニケーション教育

～医歯薬学における模擬患者参加型教育～

日時: 平成24年12月1日(土) 9:00-12:00

場所: 医学部第3、第4会議室

参加人数: 27名

講師: 藤崎和彦教授

(岐阜大学 医学教育開発研究センター)

徳島大学における医療コミュニケーションのレベルアップを目指して、その先駆者である藤崎先生をお招きし、模擬患者の演技ポイント、ファシリテートの方法について学びました。



★医療教育開発センター HP <http://www.hbs-edu.jp/index.html>

徳島大学 煌めく未来のために！

— AWAサポートセンターの活動 —

徳島大学AWAサポートセンター長 本仲 純子

AWAサポートセンターでは、皆様のご支援とご協力のもと、「徳島大学AWA（OUR）サポートシステム」事業（文部科学省科学技術人材育成費補助金・女性研究者研究活動支援事業）（平成22年度～24年度）を計画に沿って展開することができました。今後も継続して事業展開を行っていく予定です。では、最近の主な事業についてここに紹介させていただきます。

第3回啓発セミナーの開催

日亜メディカルホールにおいて第3回啓発セミナー「女性研究者の躍進！魅力ある大学に」が開催されました（H24.9.27）。朴木佳緒留氏（神戸大学大学院教授）は「国立大学における男女共同参画の意義と方策」、鳥取桂氏（大塚製菓株式会社）は「みんな違ってみんな良い」のテーマで女性の力を社会に生かすための講演をされました。坂田ひろみ氏（徳島大学准教授）は「女性研究者の子育て」について話されました。また、参加者との活発な意見交換がなされました。



朴木佳緒留氏



第3回啓発セミナー

第3回四国女性研究者フォーラムの開催

第3回四国女性研究者フォーラム「貴女の研究！煌めく未来のために」が開催されました（H24.11.2、垂メディカルホール）。大島まり氏（東京大学大学院教授）は「拓がる工学のすそ野と女性研究者」、塩見春彦氏（慶應義塾大学教授）は「科学的根拠のないバイアスを理性的・意識的に排除する」と題して講演されました。パネルディスカッションでは、コメンテーターとしてご登壇いただいたご来賓の高井美穂氏（前衆議院議員）、板倉周一郎氏（文部科学省）からも多くのコメントが授けられました。



パネルディスカッション風景

第3回メンター研修会の開催

平成24年11月15日と16日の両日、蔵本キャンパスと常三島キャンパスにおいて、中井俊樹氏（名古屋大学高等教育研究センター准教授）を講師にお招きし、メンター研修会が開催されました。40名の参加者がメンターに関する知識やコミュニケーション方法についての研修を受けました。今年5月から運用されているメンター制度は利用者から好評を得ています。お問い合わせはAWAサポートセンターまで。

中井俊樹氏



中井俊樹氏

徳島大学研究者座談会の開催

徳島大学女性研究者ロールモデル集「Woman」第3号掲載記事のために座談会が開催されました（H24.12.11）。研究支援制度は利用者からも大変好評で、引き続き実施していきたいと学長が話されました。ロールモデル集Woman第3号は1月に出版されましたので、是非一度手にとってご覧ください。



ロールモデル集Woman第3号



ロールモデル集Woman第3号

その他、平成24年11月30日には高松で第4回中国四国男女共同参画シンポジウムが開催され、徳島大学からは阪間稔教授がパネリストとして登壇されました。



中国四国男女共同参画シンポジウム

また、次世代育成にむけて、AWAサポートセンター長により10月18日には城ノ内高等学校で「水の化学」、10月25日には城東高等学校で、3月15日には海部高等学校で「理系の進路選択について」の講義が行われました。いずれも活発な質問があり、理系に対する関心が高まったようでした。

今後とも、本事業に対しまして多大なるご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「国際交流の夕べ」を開催して

国際コーディネーター／医学部長補佐 村澤 普惠

平成24年12月21日（金）、HBS研究部、疾患酵素学研究センター、疾患プロテオゲノム研究センター主催による「国際交流の夕べ」を、医歯薬事務部学務課と国際課蔵本分室運営実施にて、ウェルカ（徳島大学病院西病棟11階）で開催しました。今回で9回を数え、今年は蔵本地区留学生とその家族、日本人学生、教職員合せて約100名が参加し、相互に交流を深めました。

交流会は、教育支援センターのカルビ・ブカサ先生の乾杯のご発声で始まりました。ウェルカのシェフが腕によりをかけて用意してくださったたくさんのお料理を堪能し宴もたけなわとなった頃、バングラデシュのAsish Kumar Dasさんによる「Major Festivals and Foods of Bangadesh（バングラデシュのフェスティバルと食べ物）」、ペルーのRita C. Orihuela Camposさんによる「Peru: Land of Mysteries（神秘的の国―ペルー）」学生サークル「外国語研究部」の酒井遥介君による「Japaneseness（日本人らしさ）」の発表がありました。また、栄養生命科学教育部分子栄養学分野の大西律子さんによる書道のお披露目もあり、見事な筆さばきに留学生から歓声があがり、盛んにフラッシュがたかれました。交流会の最後には、インドネシアからの留学生Asukin Nurさんとそのグループによるインドネシア民族楽器アングルン（竹製の打楽器）の演奏が行われ、水が流れるような涼やかな音色に参加者から盛大な拍手が送られました。結びとして玉置俊晃HBS研究部長による閉会のご挨拶があり、全員で記念撮影をして交流会の幕を閉じました。

母国を遠く離れて、徳島大学蔵本キャンパスでともに学び研究する留学生の皆さんに、研究成果だけでなく、楽しい思い出を母国に持って帰ってもらおうと毎年開催している「国際交流の夕べ」。この交流会を通して、世界中に友情の輪が広がることを願っています。

留学生の家族で小さかったお子さんが高校生になり、徳島で出会ったカップルが国際結婚し、新しい生命が誕生し…と、交流会で留学生の皆さんに会うと留学生それぞれの徳島での歴史を感じます。次回開催は節目の10回目の開催です。留学生の皆さんに、徳島での幸せな歴史をもう1ページ加えていただけるよう、大いに楽しんでいただける交流会にしたいと思います。

末筆になりましたが、HBS研究部、疾患酵素学研究センター、疾患プロテオゲノム研究センター、医学部、歯学部、薬学部、医歯薬事務部学務課、そしてウェルカの皆様、交流会開催に多大なご配慮とご協力をいただきましたことを、この紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。



書道を披露する大西律子さん



アングルンを演奏するインドネシア人留学生



交流会での記念撮影

平成24年11月20日、長井記念ホールで第9回HBS公開シンポジウム「ニュートリウム研究の最前線」が開催されました。疾患ニュートリウム研究は、オミックス研究の手法を用いて個人レベルで健康の維持増進と疾病リスクの低減による健康寿命の延伸に寄与する疾病リスク予知技術の開発やその成果に基づく機能性食品の開発につながる研究領域です。そこで、特別講演として富田勝教授（慶應義塾大学先端生命科学研究所・所長）を招聘して「メタボローム解析技術の医療と食品分野への応用」を拝聴させていただきました。生物を包括的に理解しようとするとき、ゲノム解析やプロテオーム解析に加えて、メタボローム解析はきわめて重要です。富田教授は、どういう条件の時にどんな物質がどのくらい生体内に存在するかを網羅的に解明できるメタボローム解析の世界的トップランナーです。医療分野の研究成果では、各種がんやアルツハイマー、うつ病などの精神疾患、肝炎、腎炎などを血液分析で診断する方法の開発、唾液で、口腔がん、乳がん、膵臓がんを発見する手法の開発、がん細胞が酸欠・栄養枯渇状態でもしぶとく生きるための特殊な呼吸の発見です。食品分野では、日本酒の味を決定している代謝物の同定、「ダダチャ豆」の特異的成分や保存温度と保存期間による成分の変化等です。

一般演題では、HBS研究部の奥村仙示助教（臨床栄養学分野）に「栄養学領域におけるメタボローム解析の活用」、島袋充生特任教授（心臓血管病態医学分野）に「異所性脂肪蓄積とニュートリウム」、徳村 彰教授（衛生薬学分野）に「消化管の管腔側から作用するリゾリン脂質メディエーターの動態－質量分析による解析－」、井本逸勢教授（人類遺伝学分野）に「深化するゲノム解析で加速する疾患ニュートリウム研究」について発表していただきました。

今後は、消化・吸収や免疫状態など多様にかかわるヒトに特有の腸内細菌叢を初めとするメタゲノムに至るまで、個人の持つ膨大なゲノム情報をどのように用いて有効な予測モデルを構築していくことが期待されます。



HBS市民公開講座開催報告

■ 徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部、中国・四国広域がんブルフェシヨナル養成コンソーシアム共催市民公開講座「ベッドサイドから生まれる未来のがん治療研究 ーチーム徳大の取り組みー」を終了して

中国四国高度がんプロ養成基盤プログラムカリキュラム委員長 丹黒 章

われわれ大学人はともすれば診療室や研究室にこもり、学会や世界に向かっての情報発信や交流はあるものの地域との交流が等閑になりがちである。徳島大学は四国で一番古い大学であり、徳島の地に根ざした大学である。それ故、われわれが何をを目指しているのか、また、大学で行われている教育や研究について県民に周知する義務がある。定期的に行っている徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部の公開講座を、今回は本年度から改めて始まった中国・四国広域がんブルフェシヨナル養成プログラムとの共催で、2012年11月25日13時から「ベッドサイドから生まれる未来のがん治療研究 ーチーム徳大の取り組みー」と題してホテルクレメント徳島で開催した。当日は晴天に恵まれ、1時間前から約400名の聴講希望者が会場のクレメントホール前に列をなし、用意した席も足らなくなり、急遽、座席数を増やす盛況ぶりであった。

玉置俊晃研究部長のあいさつで始まり、1) 東雅之教授（口腔内科学）による「がん治療と周術期口腔管理」（司会 消化器内科学 高山哲治教授）、2) 中屋豊教授（代謝栄養学）による「がんと栄養学」（司会 呼吸器外科 先山正二診療科長）の講演に県民もメモを取りながら、熱心に聴講されていた。休憩を挟んでトクシマフィットネスラボの関本真美代表の指導でストレッチを行い、体がぽかぽかりラックスした状態で、後半の講演、3) 西岡安彦教授（呼吸器膠原病内科学）による「がんと免疫：治療学としての現状と展望」（司会 胸部・内分泌・腫瘍外科 丹黒章）、4) 井本逸勢教授（人類遺伝学）による「がんと遺伝子：それぞれの患者さんに合った治療」（司会 泌尿器科学 金山博臣教授）が行われた。徳島新聞という購読率90%を誇る地域メディアとタイアップした公開講座であったため、事前の新聞記事やパンフレット、12月23日の天皇誕生日にあわせて掲載された特集記事により、講座に参加できなかった県民にも内容を周知でき、がん治療における徳島大学の集学的取り組みや教育、研究活動についても県民に深く理解してもらうことができた満足している。



新任教授ご挨拶

看護学講座



看護教育学分野

岩佐 幸恵

平成24年12月1日付で、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部看護教育学分野を担当させていただくことになりました。私は、昭和62年に徳島大学教育学部を卒業した後、7年間の臨

床経験を経て、看護教育の道に進みました。主な研究テーマは、看護職のキャリア形成支援、前頭葉機能及び自律神経機能の発達に関する研究などです。看護教育学分野の役割は、看護学生が、新人看護師となり、2～3年の臨床経験を積んで一人前となり、いずれ中堅看護師となり、そしてエキスパートへと成長していく過程を支援することだと考えています。皆様方には今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。



学校保健学分野

奥田紀久子

平成25年4月から学校保健学分野の教授を務めさせていただくことになりました。

学校保健学分野には二つの大きな役割があると考えています。一つは、学校に通う児童・生徒の健康と発育を支援する養護教諭の人材育成という役割、もう一つは、子どもたちの健康実態と課題を明らかにし、健康教育のあり方を探究するという研究的役割です。現在、私が取り組んでいる研究は、将来の社

会を担う子どもの健康と健やかな発育の実現に寄与できる内容を中核としています。これらは、私自身の学校教育現場での教育経験に基づいたもので、「生きる力」の育成の基盤となる基礎的研究やより良い教育の構築に結びつく教育実践の検証や教育プログラム開発につながるものです。

これからも本学での教育・研究活動を一層推進するとともに、未来ある子どもたちの健やかな発育と健康の実現に貢献していきたいと決意を新たにしています。今までと変わらずご指導、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

医用情報科学講座



放射線基礎科学分野

阪間 稔

平成25年4月1日付けで、放射線基礎科学分野教授に就任いたしました阪間稔と申します。大学院は、東京都立大学大学院理学研究科核・放射化学教室に進学し、大型加速器施設を利用した新核種探索や迅速化学分離の研究に携わってきました。平成

12年に、人生初の徳島に移り、これまでの研究を継続しつつ、現在では、高感度元素分析であるICPMSの生命科学応用研究への展開や、特許技術である小線源治療に絡む品質管理測定の装置開発へと広範な研究活動を行っています。放射線基礎科学分野の前澤博先生の後任として、分野のみならずHBS研究部の発展に貢献できるよう、日々洗練琢磨する真摯な教員を目指していく所存であります。皆様方には引き続きご指導を賜りますようどうかよろしくお願い申し上げます。

医用検査学講座



微生物・遺伝子解析学分野

片岡 佳子

平成25年4月1日より、医用検査学講座微生物・遺伝子解析学分野に就任いたしました片岡佳子と申します。昭和59年に岡山大学薬学部を卒業し、徳島大学医学部細菌学講座の大西克成教授の下で教務員として研究活動を開始し、“腸内菌とヒトの健康”を基本テーマに研究活動を行ってきました。平成

21年からは生体防御医学分野の安友康二教授の下で腸内菌と免疫の関連について研究させていただきました。腸内菌は難培養性菌を含む多種多様な菌種で構成されていますが、近年の分子遺伝学的解析手法の進展によって腸内菌叢の構成の相違がヒトの様々な疾病に関連していることが次第に明らかになってきています。このような研究を通じて、感染症の発症の仕組みを理解し、微生物の専門家として感染制御にあたる人材の育成に貢献したいと考えています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

■退職教授一覧

●医学系

吉崎 和男 教授(生理機能学分野)
H25.3.31定年退職
梶原 京子 教授(学校保健学分野)
H25.3.31定年退職
前澤 博 教授(放射線基礎科学分野)
H25.3.31定年退職

小野 恒子 教授(微生物・遺伝子解析学分野)
H25.3.31定年退職
川西千恵美 教授(看護技術学分野)
H25.3.31退職
●歯学系
浅岡 憲三 教授(生体材料工学分野)
H25.3.31定年退職

羽田 勝 教授(口腔保健福祉学分野)
H25.3.31定年退職
●薬学系
際田 弘志 教授(薬動態制御学分野)
H25.3.31定年退職
落合 正仁 教授(薬品製造化学分野)
H25.3.31定年退職

学会賞等受賞者紹介

第16回日本がん分子標的治療学会学術集会ポスター賞

倉本 卓哉

呼吸器・膠原病内科学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年6月28日
受賞内容：
ヒト肺がん多臓器転移モデルにおけるMacrophage-stimulating protein (MSP) の役割に関する検討

生有研シンポジウムベストディスカッション賞

栗飯原圭佑

機能分子合成薬学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年8月27日

受賞内容：
抗ユビキチン化ペプチドCblin (Cbl-b inhibitor)を用いた筋萎縮阻害剤の開発

第104回日本医学物理学会学術大会 優秀研究賞

山口 雄作

医用画像機器工学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年9月15日
受賞内容：
連続CT画像再構成法の拡張によるバイナリ・トモグラフィ

日本歯科衛生学会 第7回学術大会学術論文賞 (サンスター財団賞)

星野 由美

口腔保健衛生学分野・助教

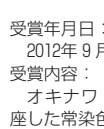


受賞年月日：
2012年9月17日
受賞内容：
被検食の性状の違いによる咀嚼・嚥下時の咬筋酸素動態の特性

日本哺乳類学会2012年度大会優秀ポスター賞

村田 知慧

人類遺伝学分野・助教



受賞年月日：
2012年9月22日
受賞内容：
オキナワトゲネズミの性染色体に転座した常染色体領域の進化

日本宇宙生物科学会第26回大会優秀発表賞

越智ありさ

生体栄養学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年9月28日
受賞内容：
抗ユビキチン化ペプチドCblin (Cbl-b inhibitor)を用いた筋萎縮阻害剤の開発

第71回日本矯正歯科学会大会優秀発表賞

黒田 晋吾

口腔顎顔面矯正学分野・准教授



受賞年月日：
2012年9月28日
受賞内容：
下顎頭の著しい吸収を伴うII級前歯部開咬症例における保存的矯正治療の長期安定性

ASBMR 2012 Annual Meeting President's Poster Competition Award

池田 翔子

臨床栄養学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年10月13日
受賞内容：
Induction of the Intact and C-terminal FGF23 Levels and Its Gene Expression in Lipopolysaccharide-Induced Acute Inflammation.

日本咀嚼学会第22回学術大会優秀口演賞

中道 敦子

口腔機能福祉学分野・講師



受賞年月日：
2012年10月13日
受賞内容：
一口量が咀嚼回数に及ぼす影響

The 6th Shanghai International Symposium on Analytical Chemistry Best Poster Award

竹内 政樹

薬品分析学分野・准教授



受賞年月日：
2012年10月17日
受賞内容：
On-line measurement of perchlorate in atmospheric aerosol based on ion chromatograph coupled with particle collector and post-column concentrator

平成24年度日本血液学会奨励賞

日浅 雅博

生体材料工学分野・助教



受賞年月日：
2012年10月19日
受賞内容：
Pimキナーゼ阻害による腫瘍進展と骨破壊の抑制

日本ペプチド学会奨励賞2012

重永 章

機能分子合成薬学分野・助教



受賞年月日：
2012年11月7日
受賞内容：
刺激応答型アミノ酸の開発とペプチド機能制御への展開

第49回ペプチド討論会若手口頭発表優秀賞

佐藤 浩平

機能分子合成薬学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年11月8日
受賞内容：
SEAlide 化学を利用したヒトGM2 活性化タンパク質アナログ収束の化学合成

第49回ペプチド討論会ポスター賞

坂本 健

機能分子合成薬学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年11月8日
受賞内容：
ペプチドチオエステル前駆体であるFmoc アミノ酸導入 N-sulfanylethyl-aniline linker の効率的合成法の開発

第39回日本臨床バイオメカニクス学会優秀演題賞

東野 恒作

運動機能外科学分野・助教



受賞年月日：
2012年11月10日
受賞内容：
脊椎椎弓根スクリューにおける椎弓根を穿破したスクリューに対する検討

第54回日本先天代謝異常学会総会若手優秀演題賞

辻 大輔

創薬生命工学分野・助教



受賞年月日：
2012年11月16日
受賞内容：
Tay-Sachs病患者由来iPS細胞の樹立と分化神経系細胞に対する酵素補充効果の検討

第54回日本先天代謝異常学会総会若手優秀演題賞

北風 圭介

創薬生命工学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年11月16日
受賞内容：
新規人工蛍光基質を用いたリソソーム酵素の脳内補充効果のin vivoイメージング

日本分析化学会フローインジェクション分析研究懇談会フローインジェクション分析進歩賞

竹内 政樹

薬品分析学分野・准教授



受賞年月日：
2012年11月16日
受賞内容：
流れ系を利用する分離・濃縮法の開発と環境分析への応用

有機合成化学協会中国・四国支部支部奨励賞

吉田 昌裕

有機合成薬学分野・准教授



受賞年月日：
2012年11月17日
受賞内容：
パラジウム触媒を用いたプロバルギルエステルと求核剤の連続的環化反応の開発

文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「融合マテリアル」第5回若手スクール優秀発表賞

栗飯原圭佑

機能分子合成薬学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年11月27日
受賞内容：
タンパク質化学合成を指向した多成分ペプチドフラグメント縮合法の開発

2012ハロゲン利用ミニシンポジウムポスター発表賞

合田 峻輔

薬品製造化学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年11月30日
受賞内容：
三価の超原子価ジASETキープロマンによる芳香族sp² C-H結合の直接アミノ化反応

日本放射線安全管理学会第11回学術大会優秀ポスター賞

長野 裕介

放射線基礎科学分野・大学院生



受賞年月日：
2012年12月6日
受賞内容：
福島県第一原子力発電所事故に関わる広域環境試料調査利用目的とした自動固相抽出分離装置の最適分離条件の検討

ASEAN plus and TOKUSHIMA Joint International Conference 4th Winner of poster Competition

後藤 崇晴

口腔顎顔面補綴学分野・助教



権垣宣明・口腔顎顔面補綴学分野・大学院生、友竹俣剛・第一補綴科・講師、永尾寛・口腔顎顔面補綴学分野・准教授、市川哲雄・口腔顎顔面補綴学分野・教授
受賞年月日：
2012年12月8日
受賞内容：
Sensation of osseointegrated implants: Systematic literature review and new neurophysiological approach

第60回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会 学術奨励賞 (Young Investigator Award)

細川 育子

口腔微生物学分野・特別研究員



受賞年月日：
2012年12月14日
受賞内容：
The Effect of Adrenomedullin on Human Th17 cells Differentiation

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長表彰



大学院ヘルスバイオサイエンス研究部では、教育・研究活動、社会貢献及び課外活動等において顕著な功績があった方に対し、研究部長表彰を行う制度を設けました。

このたび、第一号となる研究部長表彰が研究部長から授与されました。

受賞者

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
総合研究支援センター

先端医療研究部門 技術専門員

庄 野 正 行 氏

学会情報

- 徳島大学病院 循環器内科フォーラム 会長：佐田政隆
開催日：平成25年4月13日(土)
会 場：ふれあい健康館
問合先：循環器内科 医局
合田 088-633-7859 (Ext.7174)

- 第11回血管不全研究会 会長：佐田政隆
開催日：平成25年4月14日(日)
会 場：東京医科大学 教育棟5F 講堂
問合先：循環器内科 医局
合田 088-633-7859 (Ext.7174)

- 第48回日本小児腎臓病学会学術集会 会長：香美祥二
開催日：平成25年6月28日(金)～29日(土)
会 場：あわぎんホール
問合先：第48回日本小児腎臓病学会学術集会事務局
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
小児医学分野
TEL：088-633-7135
FAX：088-631-8697
E-mail：jspn2013@tokushima-u.ac.jp

- 眉山学術シンポジウム 会長：佐田政隆
開催日：平成25年8月15日(木)
会 場：日亜メディカルホール
問合先：循環器内科 医局
米田 088-633-7851 (Ext.7172)

- 第13回日本糖尿病情報学会年次学術集会 会長：松久宗英
開催日：平成25年8月23日(金)、24日(土)
会 場：あわぎんホール
問合先：徳島大学 糖尿病臨床・研究開発センター
TEL：088-633-7587
FAX：088-633-7589

編集後記

蔵本キャンパスでは病院を含めて現在4カ所で工事が行われている。中でも大塚講堂、藤井節郎記念医科学センターが出来上がると研究環境が大きく変わってくる。医学系の場合、問題は人材の確保である。もう少し多くの卒業生が臨床及び研究活動を支える仕組みを作らないと発展は望めないことは言うまでもない。

建物が増える代償として緑が減ってしまうのも困る。静かできれいなキャンパスであってほしいと願う。

(泉 啓介)



HBS研究部だより 第18号

発行日：平成25年4月1日

発行：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

編集：研究部広報委員会

広報委員：羽地達次(委員長)、泉 啓介、森口博基、
酒井 徹、大塚秀樹、尾崎和美、山内あい子、大高 章、
赤池雅史、米原壽男

<http://www.tokushima-u.ac.jp/hbs/>

問合先：医歯薬事務部総務課総務係

E-mail：isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp